

主 題：霊的リーダーのあるべき姿：監督とその資格⑤

聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章3節

テーマ：聖書の教えている霊的リーダーとはどのような存在か

今朝、皆さんと続けて学んでいきたいみことばはIテモテ3章です。聖書をお持ちの方はどうぞお聞きください。私たちは今、霊的リーダーのあるべき姿、特に教会を監督する者が満たしていなければならない15個の資格について時間をかけて学んでいます。きょうもその続きをともに考えていきたいと思えます。

その前に、ここまで聞いてきて、聖書がどんな人物を教会の監督として求めているのか、また、そういったみことばの基準を満たした霊的リーダーが教会にどれほど欠かせないものなのか、以前よりもはっきりと見えてきたでしょうか？いま一度思い返してみてください。監督の資格が15個あるうちの約半分、七つのものを私たちはこれまで学んできました。まず一つ目の資格として挙げられていたのは「非難されるところのないこと」でした。監督はその歩みのうちに周りの人から責められ続けるようなそんな明らかな罪や問題が見出されない人物であることが求められていました。二つ目の資格として挙げられていたのは「ひとりの妻の夫であること」でした。監督は、キリストが愛を示されたように、心から自分の妻を愛し、性的な聖さを保つ人物であることが求められていました。三つ目の資格として挙げられていたのは「自分を制すること」でした。監督は自分の欲求や感情、周りの状況に振り回されるのではなく、慎重な人物であることが求められていました。四つ目の資格として挙げられていたのは「慎み深いこと」でした。監督は置かれた状況にあって、主に喜ばれることが何なのかを考え、みことばから冷静な判断を下せる人物であることが求められていました。五つ目の資格として挙げられていたのは「品位があること」でした。監督はその生き方がみことばによってきちんと整えられた、人々から信頼や称賛を受けるような人物であることが求められていました。六つ目の資格として挙げられていたのは、これは先週見たことになるのですけれども、「よくもてなすこと」でした。監督は親しい人にだけでなく例外なくすべての人に対して、普段、愛やあわれみを示す関係にはない見知らぬ人に対しても犠牲を払って、その人の必要を満たそうとする人物であることが求められていました。そして七つ目の資格として挙げられていたのは「教える能力があること」でした。監督はみことばの真理をわかりやすく人に伝え、その真理をもって羊を導いたり、敵から守ったりすることのできる教える賜物を持った人物であることが求められていたのです。

こうしてみことばは神の教会を導いていくリーダーに対して、明白な基準を設けていました。監督は群れ全体の模範となるべき存在だからこそ大きな責任を持っていました。そのような大きな責任を持っているからこそ、監督たちは何よりもまずすべての面において主の前を正しく歩んでいるのか、忠実に歩んでいるのかをこの基準と照らし合わせながら吟味する必要があったのです。かつてあのスポルジョン師も自身の著書『牧会入門』の中でこんなことばを記していました。「福音を伝えようとする者が霊的に正しくない状態にあることは、その人自身にとっても、またその人の働きにとっても、最大の災いである。しかし兄弟たちよ、なんと容易に、そのような災いがもたらされることであろう。私たちは、それを注意深く防がなければならない。ある日、私は、パースからエジンバラまで、急行列車で旅をしたことがある。突然、列車が急停車して動かなくなった。その原因は、蒸気機関の一つについているほんの小さなねじが一つ折れたためであった。そして、再び出発した時、列車は、二つのピストンではなく、一つのピストンで、はうようにのろのろ進まなければならなくなった。たった一つの小さなねじがなくなったためにである。もしそのねじさえ完全であれば、列車は全速力で走っていたであろう。しか

し、その小さなねじのために、全体が狂ってしまったのである。同じように、他のすべての点で申し分のない人でも、小さな欠点のために働きの全体が妨げられたり、あるいは全く役に立たなくなってしまうことがある。…いいかげんな見かけ倒しの説教者にならないように注意していただきたい。」と。

でも同時に、もう何度も繰り返していることですが、これらの基準はリーダーだけのものではなく、霊的成熟を目指すすべての人が目標とするべきものでした。だとすれば、みことばの教える霊的に成熟した者の姿がどのようなものなのか、また自分自身のどの部分はその基準からかけ離れたものになっているのかということが、以前よりもはっきりと見えてきたでしょうか？私たちは注意する必要があります。それはこういった資格を見る時に、私たちはみことばと自分自身を比べることよりもほかの人に当てはめて考えてしまうことがあるということです。私たちにはほかの人のことがよく見えるのです。それゆえに自分と照らし合わせることもよりもまず、自分の周りの者——夫や妻であったり、教会の兄弟姉妹たちを思い浮かべて、あの人はみことばの基準から外れていると考えて、さばいてしまうことがあります。私たちに問われていることは、ほかの人がどうかではなく、まず自分が主の前を忠実に歩んでいるかどうかです。でも皆さん少し想像してみてください。今、こうしていろいろな資格、霊的な基準を見ているのですが、もし私たちがこの基準を満たそうと熱心に祈りながら歩いていけば、周りに立てるあかしはどんなものになると思います？皆さんのその歩みは確実に神様のすばらしさをあかしするものになります。また自分だけではありません。同じ熱意を持ち、同じ思いを持った人たちが教会に集って成長を目指していけば、霊的リーダーのもとにあって成長を目指していけば、成熟を目指していけば、間違いなくその教会は主に喜ばれるものとして変わっていくことができるのです。改めて思いませんか？神様は教会がご自身の望まれる姿へと変わっていくための確かな計画を、確かな設計図を持っておられると。私たちの神様は知恵深いお方なのです。私たちが理解できるようなものではありません。その神様がこうやって私たちにみことばを与え、教えてくれていました。だからこそきょうも私たちは続けて、みことばから霊的リーダーのあるべき姿、霊的に成熟した者の基準を学んで、自分自身の心と照らし合わせて吟味してみましょう。そして弱さを見つけたのであれば、変わるべき場所を見つけたのであれば、私たちのうちに働いてくださる神様の助けを祈り求めながら、ともに成長を目指して行きましょう。

では、これらのことを踏まえた上で、きょうの内容を実際に学んでいきたいと思います。いつものように、まずみことばをお読みしますので1-7節を見てください。

I テモテ3:1-7

「:1「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということばは真実です。:2 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、:3 酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、:4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。:5 ——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう——:6 また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。:7 また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。」

○監督とその資格⑧：酒飲みでない 3 a 節

さて、監督の15個の資格として八つ目に挙げられていたものは「酒飲みでないこと」でした。3節の初めに「酒飲みでなく」と書いてありました。教会を監督する者はお酒に関しても人から非難されるところのない人物であることが求められていたのです。

1. 定義

では、酒飲みでない人物というのは一体どのような存在を指しているのでしょうか？この「酒飲み」と訳されている言葉は、もともと「～と一緒に」、「～と並んで」という言葉“パラ”と「ぶどう酒」という言葉“オイノス”の二つのギリシャ語が組み合わさってできているのです。そして、これらの二つのものを組み合わせて、「ぶどう酒とずっと一緒にいる人」、要するにお酒におぼれ、それに支配されている人のことを言い表しているのです。酒飲みというのは、生活の中にお酒がなくてはならないような、周りの人がその人の歩みを見た時に、あの人はいつもお酒と一緒にいますという評価を下されるような人物を指していました。ですからパウロはここでテモテに訴えたのです。「テモテ、教会の監督を選ぶ際には、その人物とお酒との間にどんな関係があるかをよく注意して見なさい。そしてもしその歩みがお酒に支配されているのであれば、その人はリーダーの働きにふさわしい者ではありません」と。

ここで興味深いことがあります。以前私たちは監督の資格の一つとして、自分を制するというのを見ました。その時にパウロは、監督がすべての面において自分自身を慎重に制することができる者でなくてはならないと教えていました。霊的リーダーはいろいろな欲求や感情に振り回されたり、支配されたりする者であってはならないと。パウロはそういうことに関してもうすでに触れていたのです。でも、パウロはここで改めてお酒について強調したのです。監督にとって自分を制することが大切だと、もうすでに教えていたパウロが、なぜ特にお酒を取り上げて、お酒に支配されないことを監督の資格としてつけ加えたのでしょうか？それは、このお酒、ぶどう酒というものがこの当時の人々の生活に最もよく浸透していた身近な飲み物であり、またそれゆえに大きな問題を伴うものでもあったからです。当時、ぶどう酒というものは非常に一般的な飲み物でした。もちろんお酒にもよい点がありました。ウィリアム・バークレー師は古代社会におけるぶどう酒の扱いについて、「古代世界ではぶどう酒は絶えず用いられていた。水の供給がうまく行かない場合、また水を得ることが危険でさえある場合には、当然ぶどう酒が飲料水のかわりに用いられた。」と表現してくれています。皆さんも想像できることだと思いますけれども、パウロの時代には、私たちが今持っているような浄水装置などというものはありませんでした。ですから水はいろいろなものに汚染されて汚く、そのまま飲もうとすれば健康に害を及ぼしてしまうような危険なものだったのです。だからこそこの当時の人たちは、水に少量のワインを混ぜ合わせて消毒してから水を飲んだりしていました。これがこの当時の人々の間で一般的に行われていたのです。でも同時に、お酒には悪い面もありました。特にクリスチャンたちがお酒におぼれることによって、教会の中に数々の問題がもたらされたのです。例えばコリントの教会はまさにその代表例でもありました。Iコリント11:20-21にこう記されています。「しかし、そういうわけで、あなたがたはいっしょに集まっても、それは主の晩餐を食べるためではありません。食事の時、めいめい我先にと自分の食事を済ませるので、空腹な者もおれば、酔っている者もいるというしまつです。」、主のからだと流された血を覚える主の晩餐の場であって、ある人たちは酒に酔っていたのです。ある人たちはほかの兄弟たちのことなど顧みずに自分たちさえよければいいと言って、酒に酔っぱらっていました。だからこそパウロはそのことを当然よしとはしなかったのです。

2. 危険性

また、みことばはお酒に酔うことが紛れもない罪だということだけでなく、お酒が持っている危険性についても繰り返し教えていました。みことばにはお酒に対する警告というものも多々見ることができます。

1) お酒は人の思考力や判断力を鈍らせるもの

今、その危険性についてすべてのものを見ることはできませんけれども、二つだけ挙げるとすれば、まず一つ目に言えるのは、お酒は人の思考力や判断力を鈍らせるものであると記されています。聖書は明白に、お酒が人々の思考に影響を及ぼして、その結果、正しい判断ができなくなるということを教え

ていました。例えばホセア4：11には「ぶどう酒と新しいぶどう酒は思慮を失わせる」とありますし、箴言20：1には「ぶどう酒は、あざける者。強い酒は、騒ぐ者。これに惑わされる者は、みな知恵がない。」と記されています。お酒に酔って何が間違っているのか、何が正しいのかということが判断できなくなれば、どんなことになるのかと言うと、酒に酔うだけでは済まずに、ほかにもさまざまな罪を犯すようになるのです。興味深いことがイザヤ5：11に書いてあるので、その箇所を見てください。「ああ。朝早くから強い酒を追い求め、夜をふかして、ぶどう酒をあおっている者たち。彼らの酒宴には、立琴と十弦の琴、タンバリンと笛とぶどう酒がある。彼らは、【主】のみわざを見向きもせず、御手のなされたことを見もしない。」とはっきり書かれていました。酒に酔う者たちがなぜ問題なのかと言うと、それは何よりも彼らが主を見ようとしなくなるからです。お酒がもたらす大きな問題は、お酒に酔っ払った人たちが神様を忘れてしまうということです。私たちが神様のことを忘れてしまえば、当然神様を喜ばせるようなことはできませんし、神様に従っていくこともできません。自分の思うままに行動し、罪に陥ってしまうのです。ですから正しい判断ができなくなるだけでなく、私たちが本来見上げ続けなければいけない神様を忘れさせてしまう、だからお酒は危険なものだとみことばは教えていました。

2) お酒は人をとりこにするもの

また、もう一つ危険性を挙げるとすれば、お酒は人をとりこにさせるものであるということです。これもみことばは語っています。少し長いですが、箴言23：29-35にこんなふうに記されています。「わざわざのある者はだれか。嘆く者はだれか。争いを好む者はだれか。不平を言う者はだれか。ゆえなく傷を受ける者はだれか。血走った目をしている者はだれか。ぶどう酒を飲みふける者、混ぜ合わせた酒の味見をしに行く者だ。ぶどう酒が赤く、杯の中で輝き、なめらかにこぼれるとき、それを見てはならない。あとでは、これが蛇のようにかみつき、まむしのように刺す。あなたの目は、異様な物を見、あなたの心は、ねじれごとをしゃべり、海の真ん中で寝ている人のように、帆柱のてっぺんで寝ている人ようになる。「私はなぐられたが、痛くなかった。私はたたかれたが、知らなかった。いつ、私はさめるだろうか。もっと飲みたいものだ。」と。最初は少量のお酒で満足していたかもしれませんが、それが自分の心に楽しみをもたらすものだったかもしれません。でも次第にそれで満足できなくなり、その量が増え、しまいにはここで出てきている人のように、もっと飲みたいものだとお酒に支配されてしまう、そういった危険があるので

す。そして問題なのは、とりこになっている人ほどその事実になかなか気づけないということです。お酒のとりこになっている人は、自分がとりこになっていることに気づくことが難しいのです。そのことはみことばだけではなくて、この世のお医者さんもそう言っています。ある医者はこんな興味深いことばを残していました。「アルコールは脳ととても親しいのですが、連日の飲酒で始終アルコール漬けになっていると、脳の細胞は梅酒の中の梅の実のようにだんだん縮んでいきます。これを脳萎縮といいます。CTやMRI検査で調べてみると、脳萎縮は脳の前頭葉に多くみられます。前頭葉というのは物事の判断や意志決定をするなど、最も高等な精神の中核ですから、そこに脳萎縮がおきると正しい判断ができにくくなります。アルコールを多く飲む生活習慣病の人は、その原因がアルコールにある事実をなかなか認めようとしません。これは前頭葉の萎縮により最適な判断ができにくくなっているためもあるでしょう」と。みことばだけでなく、この世の人たちもお酒は人をとりこにするものだとよくわかっているのです。いつの間にか私たちに神様を忘れさせ、思考や判断力を鈍らせる力を持ったものとりこになってしまう、だからこそお酒は危険なものだと聖書が繰り返し教えていました。そんな危険なものだからこそ、教会のリーダーはお酒に支配されているような者であっては絶対にならないのです。監督がお酒によって振り回されて、冷静な判断ができなければ群れを正しく導いていくことは絶対にできません。また、皆さんもお酒におぼれているような人を模範にしたいと思わないわけです。ですから監督は、特にお酒に関しても自分を制することができる者であることが求められていました。

3. 適応

この資格もこれまでと同じです。みことばは私たちひとりひとりも酒飲みでないことを求めています。パウロもエペソ5：17-18で「ですから、愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい。また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。」と書いています。酒に酔うことと御霊に満たされることは相反するものです。救われた者はお酒に自分自身を支配させるのではなく、御霊に満たされて歩んで行きなさいということが大切な教えとして記されていました。だとすれば、今私たちはそのような歩みをしているのでしょうか？私たちの歩みを見た人は、皆さんのことを酒飲みな人として扱うのでしょうか？それともそうではないのでしょうか？もしかしたら、ここにいる多くの人たちが、「私はこの点においては大丈夫です」と言われるかもしれません。それはすばらしいことです。でも皆さんにとってお酒は大丈夫なものかもしれません。ではほかのものはどうでしょう？皆さんの歩みを見た時に、神様以外のもの自分がとりこになっているようなものはないでしょうか？これがないと困ります、これを取り上げられたら困りますと。気づいたらそれを求めてしまっているような、自分の心を支配しているようなものはないでしょうか？もし私たちが神様を見上げようとする時に、私たちの目を神様から遠ざけるものであるのだとすれば、そのようなものは避けるべきです。もし私たちの心を神様に向けるのではなく、神様を忘れさせるように仕向けるものがあるのだとすれば、それらから離れることです。

またもしかしたら、「自分はお酒をたまに飲みます、でもそれに支配されていないから大丈夫です」と考えておられる方もこの中にいるかもしれません。確かに聖書の中に、お酒をいっさい飲んでではないといった教えはありません。だからある人たちは飲むか飲まないかはその人に与えられた自由だと考えていたりもします。もちろんいろいろな考え方があります。でもぜひこの機会によく自分自身のこととして考えてみてください。私たちがきょうみことばを通して見てきたように、お酒というものは非常に大きな危険を伴うものでした。私たちの思考力や判断力を鈍らせたり、何より神様を忘れて罪へと導く危険性を伴うものだったのです。これはお酒に限りませんけれども、自分を罪に陥らせる可能性があるもの、そのような危険があるとわかっているようなものから離れて自分の身を守っていくことは知恵のある行動です。

私たちは確かにキリストにあっていろいろな自由が与えられています。私たちはいろんなものを楽しむことができるのです。食事を楽しむこともその一つです。でもその自由にも限度があります。パウロはローマ14：20-21で「食べ物のことで神のみわざを破壊してはいけません。すべての物はきよいのです。しかし、それを食べて人につまずきを与えるような人の場合は、悪いのです。肉を食べず、ぶどう酒を飲まず、そのほか兄弟のつまずきになることをしないのは良いことなのです。」と書いていました。いろいろなものを楽しむことができます。でもポイントは、もし私たちのふるまいがほかの兄弟姉妹や自分の家族、自分の子どもといった者たちに対して模範となっていないのであれば、信仰のつまずきになっているのであれば、それは愛ではないということです。もしつまずきになるようなものだとすれば、それはしないことが良いことになります。

また同時に、自分のしていることに関して、自分の心のうちに少しでも疑いを感じながらしているのであれば、迷いを持ちながらしているのであれば、それは罪なのだということもパウロは教えていました。先ほどの続き、ローマ14：23に「しかし、疑いを感じる人が食べるなら、罪に定められます。なぜなら、それが信仰から出ていないからです。信仰から出ていないことは、みな罪です。」とあります。ですからもし私たちがやっていいことなのか、悪いことなのかと疑いを持ってやっているのであれば、そのようなことはしないようにと。それが信仰から出ていないのであれば罪だとはっきりと教えられていました。これらのことを踏まえて、ぜひ自分自身で考えてみてください。自分はキリストをあかしする者としての模範を立てているのでしょうか？それともだれかのつまずきになっているのでしょうか？また今、

自分がしていることをはっきりと、私は何も間違っていることはしていません、正しいことだと、ほかの人の前で、また何よりも神様の前で言えるでしょうか？これは皆さん、お酒だけではありません。それ以外のものも同じです。もし私たちがそう言えないのであれば、私たちはキリストを愛するがゆえに、私たちはそのあかし人として生きているがゆえに、それらのものをやめることです。そしてほかの何にも勝る満足や喜びというものを、私たちがキリストの中に持っている以上、そのキリストにある満足で心を満たして歩み続けていくことです。これが八つ目にパウロが挙げた監督の資格、「酒飲みでないこと」でした。教会のリーダーはぶどう酒にいつも支配されている人物ではなく、自分を慎み深く制することが求められていたのです。そしてそれは私たちひとりひとりにとっても同じでした。

○監督とその資格⑨：暴力をふるわず 3b節

さて、監督の15個の資格として九つ目に挙げられていたものは「暴力をふるわないこと」でした。3節の続きに「暴力をふるわず」とあります。教会を監督するものは暴力に関しても非難されるところのない人物であることが求められていました。これは聞いただけで当たり前のことだと私たちは思います。残りの時間を使って、この資格が何を意味しているのかをよく考えてみましょう。

1. 定義

まずこの「暴力をふるう」ということばには、もともと「暴力を用いて人を傷つける」とか、「拳で人を脅す」といった意味があります。このことから暴力をふるう者というのは、怒りなどを覚えた時にその怒りをすぐに実際の行為として表す人物だとすることができます。どんなことがあるかということ、人を叩いたりすることもそうです。物に当たることもそうですし、また時にはことばの暴力を用いて人を傷つけようとすることもそうです。この人物は、自分の思いどおりにならないことがあれば、すぐに怒り、その憤りを抑えることができないがゆえに乱暴な行動をとるのです。ある註解者は「（この言葉は）論理的な言葉よりも己の拳を振るうことを好む、短気な人を描写している。」と定義していました。

また、ここで一つ皆さんに覚えていてほしい興味深いことがあります。それはこの「暴力をふるわず」と訳されていることばは、実は新約聖書の中でここともう1カ所、テトス1：7に出てきます。そのどちらにおいても酒飲みでないという資格に続けて用いられているのです。テトス1：7に「監督は神の家の管理者として、非難されるところのない者であるべきです。わがままでなく、短気ではなく、酒飲みでなく、けんか好きでなく、不正な利を求めず、」と書いてありました。ここで「けんか好きでなく」と記されていることばがテモテ3：3で私たちが見ている「暴力をふるわず」と同じことばです。もちろんこれは人が暴力を振るうのは酔っ払った時だけだということを言わんとしているわけではありません。パウロはこの二つのことばを組み合わせることによって、暴力をふるう人がどんな存在かをわかりやすく描いてくれたのです。酔っ払っている人、お酒によって支配されている人というのはどんな行動を取るでしょう？気が大きくなったり、正しい判断ができないがゆえに見境なく周りに暴言を吐いたり、暴力をふるったりするのです。私たちはニュースを通してそのような事件を見ることがあります。暴力をふるう者もこれと同じです。この人物はお酒ではなく、怒りに心が支配されているのです。例えば自分が願っていることがかなわなかったり、自分の思い描いていたことを人に邪魔されたり、自分の期待に反するような扱いを受けたとすれば、どうして自分はこんな扱いを受けないといけないのだろうか、そんな扱いに自分は値しません、そういった不満が募り、心に怒りが込み上げてくるのです。そして、その怒りを抑えられない結果、自分の邪魔をした人に対して仕返しをしようとして相手をつけるような行動をとるのです。まとめるとポイントはこういうことです。暴力をふるう者というのは、その心のうちに何かしらの自分の願いや理想というものを持っているのです。そしてそれを邪魔するようなものに対しては怒って仕返しをする権利があると信じている人物だということなのです。この人物は自分の思いどおりにならないことがあれば、暴力や暴言を用いてもかまわないと心で思っているのです。

そして、当然パウロはこのような人物は教会の監督にはふさわしくないものだと訴えていました。でもこれも当たり前のことです。羊を牧する霊的リーダーが怒りに任せて暴力をふるうような者であれば、羊は安心して身を委ねることができません。また監督がプライドにあふれて、自分の願いを優先して、それを妨げるような者に対しては罰を与えるようであれば、だれもそのような羊飼いに、リーダーについて行こうとは思いません。そのような模範になりたいとも思いません。このような者は教会全体を導いていく羊飼いには到底なれないのです。このことは歴史を振り返っても明白です。かつて自分たちのことにしか関心を払わなかったイスラエルの羊飼いたちに対して、神様はこんな宣告を下されていました。エゼキエル34：1-4、10に「次のような【主】のことばが私にあった。「人の子よ。イスラエルの牧者たちに向かって預言せよ。預言して、彼ら、牧者たちに言え。神である主はこう仰せられる。ああ。自分を肥やしているイスラエルの牧者たち。牧者は羊を養わなければならないのではないか。あなたがたは脂肪を食べ、羊の毛を身にまとい、肥えた羊をほふるが、羊を養わない。弱った羊を強めず、病気のものをいやさず、傷ついたものを包まず、迷い出たものを連れ戻さず、失われたものを捜さず、かえって力ずくと暴力で彼らを支配した。」、だからこそこう最後に言うのです、「神である主はこう仰せられる。わたしは牧者たちに立ち向かい、彼らの手からわたしの羊を取り返し、彼らに羊を飼うのをやめさせる。牧者たちは二度と自分自身を養えなくなる。わたしは彼らの口からわたしの羊を救い出し、彼らのえじきにさせない。」と。こうやってみことばを見た時に、神様ご自身の羊を愛しておられることを見て取ることができます。神様ご自身の羊を愛しているからこそ、自分勝手な羊飼いをよしとはしなかったのです。自分の羊を守るために、彼らから羊を取り上げました。これは今も同じです。教会を監督する者は何よりも羊を養っていくという大きな責任を負っているからこそ、自分を制し、暴力によってではなく、愛によって羊を導いていく人物であることが求められていたのです。これが監督の大きな責任でした。

2. 適応

この基準もこれまでと同じように、私たちひとりひとりが追い求めていくべきものでもありました。救われて、新しく造り変えられた私たちひとりひとりみな、怒りに任せて行動することのない、暴力をふるわない者として歩んでいくことをみことばは求めていたのです。パウロもこのように述べていました。コロサイ3：7-8に「あなたがたも、以前、そのようなものの中に生きていたときは、そのような歩み方をしていました。しかし今は、あなたがたも、すべてこれらのこと、すなわち、怒り、憤り、悪意、そして、あなたがたの口から出る恥ずべきことばを、捨ててしまいなさい。」と。かつては怒りであったり、憤りであったり、悪意であったり、そしてであったり、そういった恥ずべきことばをずっと口にしていたのです。でも救われたのであれば、あなたのうちからそういった怒りや憤りといったものを捨ててしまいなさい、怒りや憤りに心を支配させてはいけませんと教えられていました。

だとすれば、私たちはそのような者としてきょうを歩んでいるのでしょうか？周りの人たちは、私たちをこの人は暴力をふるわない人だと見るのでしょうか？よく考えてみてください。私たちは自分の願いどおりに物事が進まなかった時、自分の思っていなかったような扱いを人から受けた時、普段それにどんなふうに応答しているのでしょうか？自分の邪魔をした人に対して怒りを募らせ、その人にやり返すことに心がとらわれていないのでしょうか？例えばこんなふう考えたことはありませんか？自分の夫がこんなにも私を冷たく扱った。それなら自分も同じように口をきかず、冷たくふるまったとしても問題ないと。夫が先にしたから、冷たくする権利が私にあると。妻がこんなにもきついことばを投げかけてきた。それなら自分も同じように愛のないきついことばを返しても問題ない。妻が始めたからその権利が自分にはあると。子どもたちが言うことを聞かずに従わなかった。それなら怒りに任せて叱って、罰を与えたとしても問題ない。その権利が自分にはあると。友人や同僚がこんな嫌がらせを自分にしてきた。それによって悩まされた。それなら自分も同じように嫌がらせをして、陰でうわさ話を流したとしても問題ないと。彼らが始めたからその権利が自分にはあると。また教会の兄弟姉妹が自分の願いを満

たしてくれなくて、代わりにひどく裏切られ、それによって傷つけられた。それなら自分も同じように相手の必要を満たす必要もなければ、むしろそんなひどいことをした人とはもう距離を取って問題ない。だってあの人が始めたからその権利が自分にはあると。こうやって自分の思いどおりにならないこと、自分を傷つけた者に対して不満を抱いたり、何らかの形でやり返そうとしてはいいのでしょうか？

ここで問われていることは、自分の思いどおりにならないことがあった時に、相手が自分の期待に沿わない時に、それにどう応答しているかということです。もしかすると、怒りに任せて直接暴力をふるうことはないかもしれませんが。でも心や態度をもって、自分が傷ついているということを相手に示し、心が怒りに支配されて、さまざまな方法で仕返しをしようと思いを巡らせているのだとすれば、それは同じことです。そのような者として歩んでいるのでしょうか？こうやって私たちが考える時に、果たしてこれは私たちが立てるべきあかしなのでしょうか？答えはもちろんそうではありません。なぜなら私たちの模範であるイエス様を覚える時に、イエス様はそのようには決してふるまわれませんでした。I ペテロ 2 : 21-24に「あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」と記されています。もしだれかが仕返しをしてよいのだとすれば、イエス様こそその権利を持ったお方でした。全く罪を犯していないにもかかわらず、人々からののしられ、辱めを受け、ひどく苦しめられたのです。私たちの想像を絶するほどの苦痛を主は味わわれました。しかし、その中であって主は何も言い返さなかったのです。何もできなかったのではありません。この方は一瞬にしてそれらの敵たちを滅ぼすだけの力を持っていました。でも、自分でやり返すのではなく、正しくさばかれる方にお任せになっていました。そして、主は何よりもこの地上に来られたその目的に従って、御心に従って、私たちの罪をその身に負ってみずから進んで十字架の上ですべてを耐え忍び、死んでくださったのです。こうして主が私たちの犠牲となってくださったからこそ、この主を信じ、受け入れた私たちは今いやされ、罪を離れ、義のために生きる者として変えられました。これが私たちに示された神様の愛、すばらしい救いだったのです。

そして、このキリストの姿を私たちが知ったのだとすれば、イエス・キリストにあるその救いを、この赦しを、イエス・キリストがどのような愛を示してくださったのかをもし私たちが知ったのだとすれば、だれひとりとしてやり返す権利などありません。私たちはこの方の愛を知った者として、怒りに支配されるのではなく互いに心から赦し合っていくことです。これは非常に大切なことになります。なぜなら私たちはこれから先もだれと住もうとも、どこで働こうとも、どんな教会に通おうとも、心に怒りがわき上がるような誘惑や葛藤というものを必ず経験するからです。それは私たちが住んでいるこの世界は罪にあふれたものだからです。世界が罪にあふれているだけでなく、私たちひとりひとりも罪人です。また同時に、性別や年齢も、国籍や文化も、育ってきた環境や社会的な立場も違うさまざまな人たちとともに歩んでいこうとするのです。そうすれば、どれだけ関係が親しいものであったとしても、それは完璧なものでないがゆえに、そこには違いがあるがゆえに問題が生じるのです。夫婦の間でもそうですし、家族の間でもそうですし、兄弟姉妹の間でも同じことです。心をざわつかせ、怒りや憤り、争いをもたらすような場面に直面することがあります。そしてもし私たちがそんな場面に直面した時に、それぞれが自分が正しいのです、相手が間違っています、そんな言い争いを始めてしまえば、問題を解決することができないばかりか、一致することは絶対に不可能です。

考えてみましょう。皆さんの心の中に、今だれかに対する怒りというものが残っていないでしょうか？その人のことを考える時に、自分の心の中にねたみや苦い思い、怒りといったものが浮かんでくる

ような人はいないでしょうか？私たちがよく知っているのは、もしそのような怒りや憤りというものをそのままに置いていくのであれば、それらは自動的に消え去ってはくれないということです。そういった罪は心の中に残っています。赦しや和解を通して解決していなければ、一時的には消えたかのように思ったとしても、その場面が脳内で何度も再生されたり、そしてその時に抱いていたような同じ感情が浮かんできたりするのです。そういったものが浮かんできた時に、苦い思いや憎しみというものによって心が支配されてしまうこともあります。そしてそんな思いに心が支配され始めてしまえば、次第に相手に仕返しをしたい、相手にふさわしい報いが下るようにといった悪い願いが生まれてきます。そしてそのような願いを心のうちに持っていれば、ことばの端々や行動の裏にそういったものが現れるようになるのです。ですから私たちがそのような罪を持ち続けるということは非常に大きな問題だということです。だからこそ大切なことは、私たちひとりひとりが罪を悔い改めて歩むことです。罪を脱ぎ捨てて新しい人を身に着ることです。そして主が赦してくださったように互いに赦し合うことです。みずから進んで犠牲を払ってくださった、すべての罪を完全に赦してくださったこの方のように、みずから進んで犠牲を払って、自分を傷つけた相手に対しても喜んで赦しを示すことです。そしてもし難しさを感じるような時は、いつも神様がどんなふうにあなたを取り扱ってくださったかということを感じるのです。救いをいただいた私たちはそのような歩みができる者へと神様が変わってくださいました。そのために必要な力やみことばも与えてくださいました。だとすれば、この方の助けを祈り求めながら、怒りに心を支配させることなく、愛を実践する者として成長していくことです。そして、これが九つ目にパウロが挙げた監督の資格、「暴力をふるわないこと」でした。

〇まとめ

さて、きょう私たちは監督の資格の八つ目と九つ目をともに考えてきました。改めてどうだったでしょう？パウロは霊的リーダーが酒飲みでないことを求めています。監督はお酒にいつも支配されるのではなくて、自分を慎み深く制することができる者、そのことが大切でした。またパウロは霊的なリーダーが暴力をふるわないということも求めています。監督は怒りや憤りに振り回されたりすることなく、仕返しするような思いに支配されることもなく、みずから進んで赦し合っていくことが大切でした。これらのものが教会を導いていくリーダーが満たしていなければならない基準として挙げられていたのです。でも同時に、これらの基準はリーダーだけのものではなく、私たちひとりひとりに与えられたものでもありました。私たちひとりひとりが目指していくべき目標だったのです。キリストに似た者にならなりたいと願う者たちが目指すべき目標でした。確かに私たちのうちを見れば、足りない部分や成長しなければいけない部分は多々あります。でもそれ以上に、キリストに似た者になっていくという、その歩みにこそ私たちの喜びが、私たちの満足があります。そして、主がそんな私たちとともにいてくださるのです。私たちの主は私たちが落ち込んで助けが必要な時もともにいてくださいます。私たちが主を悲しませる時も主はともにいてくださいます。難しさを覚えて苦しむような時も、良い時も悪い時も私たちの主はともにいて、私たちの歩みを支えてくださるのです。この主のうちにいる者はもうさばきを恐れる必要はないことも約束してくださいました。この主がともにおられるのだとすれば、失敗や罪を犯せば悔い改めて成長に欠かせないみことばを心に満たし、そして日々私たちを救ってくださったその愛する主を覚えて、この主に似た者となることをともに目指していきましょう。